様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００１４９

研究課題名（和文）南宋の文人歌曲創作論における転調理論の研究

研究課題名（英文）A Study of the Modulation Theory of the Ci Songs in Southern Song Era in China

研究代表者
明木　茂夫（Akegi, Shigeo）

中京大学・国際学部・教授

研究者番号：１０２４３８６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は中国・日本音楽の古典的転調理論の実態に関するものである。南宋の張炎『詞源』巻上に記された一種の転調である「犯調」について、その複雑な理論には「調の命名法」と「実際の音程」という二つの要素が関係していることを明らかにした。
　またその調査の過程で見出した豊田市中央図書館貴所蔵の江戸末期写本・安倍季良『山鳥秘要抄（律呂）』について、「反音（返音）」と呼ばれる転調法を中心に考察を行った。特に『山鳥秘要抄』の本文については従来詳細な研究が行われていなかったため、本文の翻刻及び校勘を行い、引用文献の典故を洗い出し、詳細な注釈を加えた175ページにわたる「翻刻・校注」を作成して公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　中国の「犯調」や日本の「反音（返音）」というの転調法には、いまだその解明されていない部分が残っている。本研究により張炎『詞源』の「犯調」の内「律呂四犯」と呼ばれる転調の一覧表の持つ意味合いを解明することができた。これは南宋当時の文人歌曲に用いられた転調の実態を明らかにする上で大きな意義を有する。
　また江戸末期における雅楽理論の中心的存在である安倍季良の『山鳥秘要抄』は、原本が非公開であることもあってその本文は従来詳細に研究されていなかった。本研究で作成した『山鳥秘要抄』写本の全篇にわたる翻刻・校勘、および詳細な注釈は、この分野の今後の研究の基礎資料となるものと信ずる。

研究成果の概要（英文）：This is a study of modulations used in Chinese and Japanese classical music. The way of modulation of the Chinese“Fandiao”（犯調） described in Zhang-yan(張炎)'s Ci-yuan(詞源) has not been successfully revealed and no one could explain why the tonality“Yu”(羽) modulates to the tonality“Jue”(角) just in the way which described in“Lvlv Sifan”(Four kinds of Fandiao律呂四犯) by Zhang-yan. In this study, the actual way to modulate from“Yu”to“Jue”(羽犯角) was deciphered.
“Han-on”or“Han-non”(反音 or 返音) is a classical modulation system used in Japanese“Gagaku”(雅楽) and Buddhist Music. Sancho Hiyo-sho(山鳥秘要抄) is a musical theory book written by Abe-no Sueharu(安倍季良). Theories of“Han-on”are included in it. There only are manuscripts of Sancho Hiyo-sho in Edo(江戸) era, therefore in this study, textual criticism and reprinting are made, and many annotations are added for the text.

研究分野：中国古典楽理

キーワード：詞楽　十二律呂・五声七声　張炎『詞源』　安倍季良『山鳥秘要抄』　犯調　反音・返音　中国古典音楽理論　雅楽音階・調子

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

唐宋時代に流行した「詞」は当時の文人歌曲であった。その音楽面の創作理論の集大成として重要なのが、南宋の張炎の『詞源』巻上である。その内特に「犯調」と呼ばれる一種の転調は非常に難解で、実際にどのような調からどのような調へ転調するのか、先行研究でも十分に明らかにされてはいなかった。例えば『詞源』巻上「律呂四犯」の一覧表に示されている四種の犯調は、記述されているとおりに転調を行っても一覧表通りの調にはならず、なぜそうなるかの説明も『詞源』本文には全く記されていない。一方日本音楽においても、雅楽や仏教声明でしばしば言及される「反音（返音）」と呼ばれる一種の転調がある。これについては雅楽や仏教音楽の専門家により様々な研究が行われているが、いまだ不明の部分が多く、さらに中国の転調理論との比較検討も必ずしも充分に行われていない。

２．研究の目的

本研究は上記のような状況の中、中国古典音楽理論の転調理論における未解決の部分の解明を試み、さらに日本古典音楽における転調に関する資料に中国音楽研究の立場から検討を試みようとするものである。

まず「犯調」について、『詞源』本文の記述を詳細に検討することを中心に、周辺の音楽資料を参照し、その転調方法の理論および実際の音楽における使用の実態を検証することが第一の目的である。そうした音楽資料の検証の過程で、豊田市中央図書館貴重書庫において、日本の江戸末期雅楽資料である安倍季良『山鳥秘要抄（律呂）』写本を見出した。同書には、日本古典音楽の転調である「反音（返音）」に関する詳細な記述が含まれている。当時の雅楽理論家の中心的存在であり、雅楽再興に大きな役割を果たした安倍季良が「反音」をどのように解釈し説明しているかは、この分野の研究には非常に重要なことである。しかしその一方、『山鳥秘要抄』は安倍家原本が非公開となっていることもあって、その本文の詳細な研究は従来ほとんど行われていなかった。そこで『山鳥秘要鈔』の全文に校勘を加え、その「反音」の記述内容を検証することが第二の目的である。

３．研究の方法

『詞源』および『山鳥秘要抄』の本文について、異本との間で校勘を行い、引用文献や周辺資料を参照しつつ、注釈を加え、特に転調に関する部分の所論を明らかにし、実際の音楽における使用実態を明らかにする。さらにそこから得られた情報を校勘・注釈の形で整理して公開し、さらなる研究の基礎資料とする。

特に『詞源』については、従来の研究者による注釈を集めて整理し、他の資料と付き合わせながら、「犯調」という転調の実態を明らかにする。

また『山鳥秘要鈔』については、まず研究の前提として、その全文の翻刻と校勘を行う。さらに引用文献の典拠を洗い出し、詳細な注釈を作成する。それを元に安倍季良の「反音」に関する記述を検証する。

４．研究成果

張炎『詞源』に記される「犯調」については、その「律呂四犯」に述べる「羽犯角」の意味合いが従来は充分に説明されていなかった。例えば第一列の「黄鍾宮」の同主調について、「宮犯商」と「商犯羽」はよいとして、「夾鍾羽」に対して「羽犯角」を行っても「無射閏」にはならず、またそもそも「無射閏」は第一列の調と同主調の関係にない。これに対して考証を行った結果、この転調法には「実際の音程」と「調子の名称」という二つの要素が、時代的要因を含めて関係していることが判明した。すなわち、ここで「無射閏」と呼ばれている音階の実際の音程は、実質的には他の調と同主調の「大呂変宮」である。これならば実際の音程の面から見て矛盾しない。一方、この「大呂変宮」が名称の上で「無射閏」と呼ばれた事情については、唐代と宋代で律高（ピッチ）が異なること、律呂音階と俗楽音階（律呂調と下徴調）では調の名称がことなることの二点が関係している。すなわち、「大呂変徴」に音程が等しい下徴調は「夷則角」であり、宋代の「夷則」は唐代以来の「無射」に相当し、さらに俗楽の角調式は閏調式に相当する。こうした事情から、唐代以来の「大呂変徴」は宋代においては「無射閏」と呼ばれていたと考えられる。おそらく実際に演奏する宋代の楽工（楽人）は伝統的な調を用いており、それを宋代の言い方で読み替えた、その名称を『詞源』「律呂四犯」は一覧表として提示したのであろう。本研究で得たこうした検証結果については『詞源』巻上校注の形で公表した。

一方『山鳥秘要鈔』については、豊田市中央図書館所蔵本を底本として、その全文について 175 頁からなる翻刻・校注を作成し公表した。校勘の作業に際しては、他の所蔵機関所蔵の関連写本と詳細に照らし合わせながら、京大本は公家の今出川公久が安倍季良本人から借りた本を書写したものであるが底本とはやや系統を異にすること、東北大本は透き写ししたと思われるほど底本と筆跡が類似しているが何箇所か文字が異なることなどを明らかにした。また国会図書館本の識語には、挙母藩主内藤政成の蔵本を書写したことが記されている。底本が挙母藩にあったことを考えれば、国会図書館本はまさに底本を書写したものである可能性が高い。詳細に見ると、底本を書写しつつも誤字等を修正した跡が確認できる。さらに、彦根藩所蔵本については、挙母藩主内藤正成が彦根藩の井伊家から内藤家の養子となった人物であることから推して、底本とも関係の深い写本であることが想像できるが、校勘の結果やや系統の異なる写本である可能性

のあることが判明した。

一方、『山鳥秘要抄』の「反音之事」条についても翻刻校注を元に解読を試み、季良の「反音」に対する解説の概要を明らかにした。特に音階一覧表の実際の音程が持つ意味合いについては、翻刻校注の注釈内にて詳細に解き明している。季良は『残夜抄』や『管弦音義』等の反音に関する基本的古典文献を引きつつ、これを季良独自の音階表で説明し、また笛の運指の面からの説明を展開している。『山鳥秘要鈔』は安倍家原本から特に律呂関係の部分を抄出した写本であり、藝大本や岩瀬文庫本はさらに『山鳥秘要抄』の内の律呂論を抜き出して補筆した再編本である。季良自信、雅楽を学ぶ人々への指南書・解説書としてこれらの資料を積極的に利用していた。「反音」というやや難解な転調論を含む雅楽の音階理論の解説にかなりの紙幅を裂いているのもそのためであろうし、季良と何らかの縁がある人物のところに写本が残されているのもそのことと関係があると考えられる。季良の元に入門して雅楽を学んだ内藤正成が『山鳥秘要抄』の写本を所蔵していたことも、故なきことではないと言えよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　9件）

１．著者名 明木　茂夫	４．巻 1-2
２．論文標題 豊田市中央図書館蔵安倍季良撰『律呂（山鳥秘要抄）』翻刻校注（二）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 中京大学『教養教育研究院論叢』	６．最初と最後の頁 20-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 明木茂夫	４．巻 1-2
２．論文標題 豊田市中央図書館蔵安倍季良撰『律呂（山鳥秘要抄）』翻刻校注（二）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教養教育研究院論叢	６．最初と最後の頁 20 - 80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 明木茂夫	４．巻 41
２．論文標題 橘春暉の古律関連写本『古律図説』『律呂抄』簡介	５．発行年 2021年
３．雑誌名 中京大学図書館学紀要	６．最初と最後の頁 41 - 96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 明木茂夫	４．巻 31
２．論文標題 張炎『詞源』巻上譯注稿（四）「十二律呂」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中京大学文化科学研究所『文化科学研究』	６．最初と最後の頁 96-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 明木茂夫	4．巻 40
2．論文標題 張炎『詞源』巻上譯注稿（五）「律呂四犯」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『中京大学図書館学紀要』	6．最初と最後の頁 56-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 明木茂夫	4．巻 12-1
2．論文標題 豊田市中央図書館蔵安倍季良撰『律呂（山鳥秘要抄）』翻刻校注（一）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中京大学『国際教養学部論叢』	6．最初と最後の頁 103-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 明木茂夫	4．巻 12-2
2．論文標題 豊田市中央図書館蔵安倍季良撰『律呂（山鳥秘要抄）』翻刻校注（三）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 中京大学『国際教養学部論叢』	6．最初と最後の頁 97-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 明木　茂夫	4．巻 1
2．論文標題 豊田市中央図書館蔵安倍季良撰抄本『律呂』について　――解題及び『山鳥秘要抄』諸伝本との比較――	5．発行年 2019年
3．雑誌名 近世日本と楽の諸相	6．最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 明木　茂夫	4．巻 30
2．論文標題 東京藝術大学附属図書館蔵『山鳥秘要録中律呂之論』　―解題と翻刻	5．発行年 2019年
3．雑誌名 文化科学研究	6．最初と最後の頁 111-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 明木　茂夫	4．巻 39
2．論文標題 西尾市岩瀬文庫所蔵江戸期抄本『呂律反音事』　―翻刻と考察	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中京大学図書館学紀要	6．最初と最後の頁 66-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 明木茂夫
2．発表標題 豊田市中央図書館所蔵江戸期抄本『律呂』と彦根城博物館所蔵井伊家伝来典籍『山鳥秘要抄・律』との関係について
3．学会等名 第40回愛知音楽研究会
4．発表年 2019年

1．発表者名 明木茂夫
2．発表標題 豊田市中央図書館所蔵江戸時代の雅楽書と挙母藩主内藤政成公との関わりについて
3．学会等名 豊田市中央図書館講演会
4．発表年 2019年

１．発表者名 明木茂夫
２．発表標題 三河に伝わる江戸時代の漢籍と雅楽書　―半田市立図書館の漢籍と豊田市中央図書館の雅楽書について
３．学会等名 小栗風葉をひろめる会
４．発表年 2019年

１．発表者名 明木茂夫
２．発表標題 豊田市中央圖書館藏江戸期寫本『律呂』初探　―『山鳥秘要抄』諸寫本との比較を通して分かったこと
３．学会等名 愛知音楽研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関